

わたしの聖戦

◎◎女性が働くところ◎◎77

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

お笑いがテレビ離れを加速する

最近、テレビから遠ざかったという人は多いのではないだろうか。

テレビ以外の楽しみを見つけたというより、テレビ番組が面白くないという理由の人によく出会う。自分がそうだからかもしれないが、はつきり言って、ニュースやドキユメンタリーや一部を除けば、まったくテレビはつまらない。

特に、続々と登場する「一発ギャグ」を発する若手のお笑いが笑えない。スタジオにいる一般客がおもちゃのサルのごとく手を叩いておおぐち開けて笑っているのを見ても、何が面白いのかわからない。それどころか、少し

売れてくると同じ顔ぶれがあつちこつちで同じようなことをしているので、面白くないとか笑えないというよりも、それらを乗り越して不快感さえ覚えることも少なからずある。

少し前に、秋葉原で無差別の大量殺人事件があった。犯人は直前まで自分の気持ちをネットに書き込んでおり、のちにそれらの一部が公表された。そのなかに、他の人と一緒にいても孤独感にとらわれる自分を嘆く内容があった。「テレビのお笑いを見て皆が笑っているのに、何が面白いのかわからなくて笑えない」というものだったと思う。

皆が笑っているのに自分は笑えない、その書き込みには孤立していく犯人の暗い一面が漂っている。しかし、普通ならそこで「なにが面白いの？」と軽く問いかければそれで済む話ではないだろうか？

「KY」、つまり空気を読めない人はいじめや仲間はずれになるといわれる。ひとの感情や物事への反応は違って当たり前なのに、いつも一緒にいて同じことに笑い、同調し、嫌なことでも嫌といえない、などというのは実に恐ろしい事態だと思われる。



白いじゃん」とでも言っただなら、「そうかな、僕にはさっぱりわかんないや」とそのままの気持ちをお伝えれば、何も孤独とか孤立とかおおげさないうことでもないだろう。ところが、今やそう簡単にはすまない社会にな

感じたことを素直に言えないくらいなら、そんな仲間と一緒にいなければいいのと思うのだが、なぜかひとりであることはさらに恐ろしいことらしい。他にも理由がある

とはいえ、そんなことが事件やいじめのきっかけになるとは、なんと弱々しい生物体だろうか。

ほとんど面白くもない、こどもの学芸会のほうがまだ楽しめる程度のレベルのお笑いを延々と流し続け、たいした芸もない人々を持ち上げ、少し飽きたらお払い箱にするような、安っぽい舞台を何度も何度も見せられるこちらはたまったものじゃない。それを見て笑わなければおかしいと思わせる雰囲気まん延しているのも気持ちが悪い。双方、あまりの体たらくに、誰にいうともなく視聴者をバカにするなどいいたい、でもバカでしよといわれれば、そうかもしれない。テレビ離れが進むのも当たり前だと納得しつつ、貴重な媒体だからこそ、至極残念だと思えてならない。

イラスト・三浦義雄